吉備鳥瞰 KIBI BIRD'S EYE

野門院古墳(3世紀後半)

~驚きの盛土・積石ハイブリッド古墳~

目次

- 1. おすすめポイント
- 2. 現地の説明板
- 3. 現地写真
- 4. 「鳥の目」で
- 5. アクセス



初版:2025.10.25

1. おすすめポイント

★こんな「前方後円墳」もある!!

〜驚きの「盛土・積石ハイブリッド」古墳〜

「前方後円にすりゃいいんだろ。後は俺らの流儀でやるぜ」とでも言わんばかりの形式強い「心意気、自負」を感じますしかもよくぞこんな高地(標高400m)に!

★充実の説明板と展望設備

- ・この特殊な形式の古墳を築造する過程を詳しく説明 してくれています 高度な土木技術にも注目ください
- ・是非、展望台から古墳の全体像、さらに瀬戸内を 見渡す大パノラマを楽しんでください 四国の山ってちょっと独特(笑)

2. 現地の説明板



国指定史跡有岡古墳群

善通寺市内には400基を越える古墳の存在が確認されています。 中でも筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田 川流域の有岡地区には、同一系譜上の首長墓と考えられる前方後 円墳が集中し、大麻山山麓の谷間には、いたる所に後期古墳が群 集していることが知られています。

中でも野田院古墳・磨臼山古墳・鶴が峰4号墳・丸山古墳・王 墓山古墳・宮が尾古墳は、4世紀から6世紀にかけて築造された 県下を代表する古墳で、昭和59年11月29日に史跡に指定されまし た。

この6基の古墳は当地域における歴代の首長墓であり、讃岐の 古代史解明に重要であるばかりでなく、中央や先進地域との緊密 な交流を示す貴重な遺跡です。



野田院古墳 [3世紀後半]

野田院告墳は大麻山北西麓のテラス状平 世部(標高405m)という非常に高い場所に 築かれた、丸亀平野周辺部で最古式の前方 後円墳です。

その規模は全長43.5m、後円部径21.0m、 後円部の高さ2.5m、前方部幅13.0mで、前 方部は盛り土、後円部は安山岩塊の積石に よって築かれています。

また、前方部はくびれ部が細く締まり、

先端が撥形に開く発生期の前方後円墳の特徴を示していることな どから、3世紀後半に築造されたと考えられており、最初にこの 地に登場した首長の墓ではないかと考えられています。

市内には他にも、大窪経塚・大麻山経塚・大麻山椀貸塚・丸山1 号、2号墳などの積石塚がありますが、この古墳群は坂出から綾 歌の積石塚を経て、高桧の石清尾山古墳群と連鎖することが知ら れています。

うまり、この古墳は積石 塚古墳の発生や変遷を研究 し、当時の讃岐の地域集団 関係を知る上で非常に貴重 な遺跡なのです。

填丘実測図

※古墳保存のため、石を動かさないよ ようにして下さい。



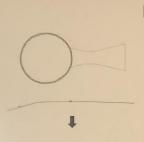
善通寺市 平成4年度

2020.3 図2-1



古墳の築造過程に関する現地説明板





作業工程①

最初に古墳を構築する場所を決めます。野田院古墳の 場合は見晴らしのいい尾根が選ばれました。

まず尾根の上を平らに整えることから始めますが、そ の周囲には急な斜面が残ります。平道部から一部傾斜部 にかけて後円部の円間を設定し、これに沿って石材を配 置しています。

作業工程②

次にその内側に石材を詰めます。平坦部では小型の石 材を詰めていくだけですが、傾斜部では内部に詰める石 材は比較的大きく扁平なものが多く、地山と逆の向きに 連続して立て、整然と配置しています。これは斜面部分 の石材が下方に滑り出すことを防ぐことが目的と思われ ます。傾斜部に高く石材を積み上げる際に、崩れにくい 積み方を知っていたようです。この工程で後円部の基礎 を水平に仕上げています。

作業工程③

作業工程②で造られた平坦部の上に二基の石室を造り 始めます。まず石室を造る部分に細かい石を敷き詰め、 この上に荒い粘土を敷き、石室最下段の石材を配置しま す。次に粘土床用の細かい粘土を敷いています。この粘 土は石室の保面だけでなく、石室最下段の石材を包むよ うにその外側にも及んでいます。この粘土の中から多数 のガラス小玉が出土しました。通常の副葬品ではなく祭 記遺物だったようです。

石室の四方の壁を積み上げながら後円部周囲の壁も同 様に高く積み、その間に石材を詰めていきます。後円部 の一段目は石室の下半分が積み上がった段階で完成しま す。この作業工程は解体修理の時に後円部の断菌で確認 できました。



後円部と前方部の接合部検出状況 (H12)

後円部と前方部の接合部に残る後 **円部 (一段目と二段目) の検出状況** です。後円部を積んだ後に盛り土の 前方部が造られたため、この部分で は後円部の石積みが崩れずに完全な 形で残っていました。後円部はこれ を参考に復党しました。



次に後円部一段目の上に二段目を造り始めますが、 この時に前方部の一部を坂道状に造っています。古墳 を造る場所を決めるにあたっては、その材料となる石 材の取りやすさも大きく影響したと思われますが、野 田院古墳の北東のある尾根付近には石材の露頭地があ 尾根伝いに運び降ろしたものと考えられます。前 方部は土でできていますが、くびれ部でその断面を見 ると後円部の1段目の高さで前方部側にゆっくり下る面 が確認できます。墳丘(後円部)へと石材を運びやす くするための坂道が造られていたようです。この作業 道を利用して重い石材を運び上げたようです。

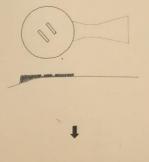
二段目は一段目よりひとまわり小さくし、まわりに 平坦な段を造っています。造り方は一段目と同じで、 石室の四方の壁が完全に積み上がった高さで後円部の 一段目が完成しています。

作業工程⑤

ここで石室に苣犬な石で蓋をします。この蓋石を覆 い隠すため、この上には更に多くの石が積まれていた ようですが、後円部の三段目は完全に崩れていたため もとの形は不明です。

最後に作業道としての使用が終わった前方部を完成 させ、その表面に石を葺き古墳が完成します。

後円部の北西側は不安定な斜面にはみ出ています。 後円部を作る場所をここから少し南東に移せば、全体 を平坦な場所に作ることができたはずです。傾斜部に 造られた後円部の側面はとても高い壁になっていて、 しかも平野の方に向いています。皆が生活する場所か らよく目立つように考えたようです。



2020.3

図2-4

野田院古墳保存整備事業 Conservation and Presentation of Stone Mound

昭和59年11月29日に有岡古墳群が国の史跡指定を受けた後、最初に王墓 山古墳、続いて宮が尾古墳の保存整備事業を実施し、平成9年度からは野田院 古墳の発掘調査と保存整備事業に着手しました。

発掘調査は平成13年度まで実施し、平成12年度からはじまった保存整備 工事は平成14年度に竣工しました。積石塚の内部構造まで調べる発掘調査や 解体修理・保存整備は国内でも初めての試みでしたが、古墳の内部構造や構 築の工程まで知ることができました。

野田院古墳が造られた時の集落は今の善通寺市街地の辺りで標高は約30m。 野田院古墳は標高400m付近にあり、全国で最も比高差のある場所に造られ た古墳としても知られています。付近には視界をさえぎる山も少なく、古墳 からは丸亀平野・三豊平野・瀬戸内海はもちろんのこと、遠く吉備(岡山)・ 安芸 (広島)・伊予 (愛媛) まで展望できます。展望台からご覧ください。



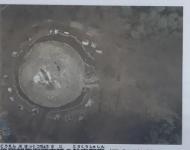


野田院古墳後円部の内部構造模型

Cross-section Model of Stone Mound

善通寺市では昭和57年度に実施されたデ業派 古墳の緊急発掘調査を契機に、市内の代表的な6 基の古墳が有岡古墳群として国の史跡に指定され ました。そして昭和61年度から平成3年度まで王 墓山古墳の、平成4年度から平成8年度まで営が 尾古墳の保存整備事業を実施しました。

続けて平成9年度から平成14年度にかけて野田 院古墳の保存整備事業を実施しました。野田院古 墳は石を積んで造った前方後円墳です。このよう な古墳は積石塚と呼ばれており、香川県を中心に 瀬戸内海沿岸部に多く分布していますが、内部構



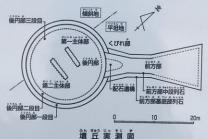
査時の航空写真 (平成12年度)

後円部の輪郭がはっきり見えます。中央には2基の竪穴式石室 が見えます。前方部には石が豊かれていますが、内部が土なの で全体が草で覆われています。

造まで解明するような大規模な発掘調査や解体復

もとの姿をとどめる部分をできるだけ残すため、 墳丘の調査は解体修理を行う範囲に限りましたが、 これまでに知られていなかった優れた土木技術や 知識によって造られていることが判削しました。

一番驚いたことは斜面部分の基礎の構造です。 後円部は平らに整えられた尾根の上から一部急な 斜面にかけて造られています。平坦な部分の内部 には小型の石材を詰めていますが、傾斜部では内 部に詰めてある石材は比較的大きく扁平なものが



	墳丘の規模				石室の規模			
	全長	44.5m	前方部の長さ	23.5m	第1主体部		第2主体部	
	後円部の直径	円部の直径 21.0m	前方部の幅	6.0m~0.8m	全長	5.15m	全長	5.70m
	後円部の高さ		前方部の高さ	Service Control	幅	0.7~0.9m	幅	0.85~1.0m
	IN NO ONE	43 E.O.	USA) DINOVINE	83 1.0111	高さ	約 1.0m	高さ	約 1.0m



傾斜部での後円部内部検出状況 (平成13年度) 比較的大きく扁平な石材を地山の傾斜と逆の向きに連続して立て、 整然と配置しています。

多く、地山と逆の向きに連続して立て、整然と配 置しています。これは斜面部分の石材が下方に滑 り出すことを防ぐことが目的と思われます。傾斜 部に石材を高く積み上げた時に、崩れにくい積み 方を知っていたようです。このような工法で後円 部の基盤が丈夫に造られています。左の石貼りは その断流模型です。

調査では構築の工程まで知ることができ、そこ で得られた資料によって野田院古墳を構築された 当時の姿に蘇らせることができました。

図2-6

2段目テラス

(石室の四壁が完全に積み上がった段階の高さ)

墳丘と石室は並行して造られ ていることがわかります

尾根の傾斜部に造られ た後円部の断面を1/2の 大きさで表現しました



地山の傾斜と逆の向きに連続して立て整然と配置された石材





図2-8

積石塚 Cairn Tomb

古墳の中には土の代わりに川原石や山石を積み上げて造った「積石塚」と呼ばれるものがあります。瀬戸内海沿岸部には香川県を中心に、古墳発生期から前期にかけて造られた数多くの積石塚が分布していることが知られています。

この他には長野県を中心に分布する古墳時代後期から終末期にかけて造られた積石塚が知られている程度で、全国的には分布していません。

朝鮮半島にも同様の積石塚が認められることから、渡来人が伝えたとする 「外来説」と、日本で独自に発生したとする「自生説」がありますが、香川県では白鳥町の成重遺跡(弥生時代中期)や善通寺市の稲木遺跡(弥生時代後期)で集石墓が確認されており、積石塚は古代の讃岐で発生したのではないかと考えられています。これは讃岐地方に古式の積石塚が多く残ることとも符合します。

野田院古墳では保存整備工事に伴う墳丘積石内部の発掘調査によって、優れた土木技術を用いて構築していたことが判開しました。讃岐地方の積石塚で内部構造が明らかになったのは初めてのことです。弥生時代の集石墓は平地にあります。また、川原石を積み上げた簡単な構造であり、短時間で技術が発達するとは考えにくいことから、自生説とともに高句麗の積石塚の構築技術の伝来も考える必要があるかも知れません。



積石塚の現地説明板

3. 現地写真



2020.3



図3-1

展望台から全形を眺める



図3-2 前方部から後方を見る



図3-3 後円部から前方を見る

4. 「鳥の目」で





前方部の「くびれ」や撥形など初期の前方後円墳の特徴が明瞭です 図4-1

2020.3





図4-2





図4-4 北西方向を望む 2020.3



図4-5 古墳の軸線は飯野山を向いているようです。

2020.3

※飯野山・・讃岐富士と呼ばれ古代から信仰の対象にもなっています

5. アクセス



▶JR善通寺駅から車で三十分ほどです





Google Mapより